



筑紫女学園大学リポジット

Elementary School Children and Community Life (2) “A Case Study on Community in Fukuoka”

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 安恒, 万記, YASUTSUNE, Maki メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/578

小学生を取り巻く地域コミュニティの現状と課題 その2

－M小学校区を事例として－

安 恒 万 記

Elementary School Children and Community Life (2) “A Case Study on Community in Fukuoka”

Maki YASUTSUNE

1. はじめに

近年、子どもと家庭、地域、学校をめぐる環境は大きく変化してきている。平成28年1月には「中央教育審議会答申（H27. 12）」を推進すべく「次世代の学校・地域」創生プランが策定された。その中で、学校にかかる観点からは、「社会に開かれた教育課程」の実現や学校の指導體制の質・量両面での充実、「地域とともにある学校」への転換という方向が、そして地域にかかる観点として、次代の郷土をつくる人材の育成、学校を核としたまちづくり、地域で家庭を支援し子育てできる環境づくり、学び合いを通じた社会的包摂という方向を目指した取り組みが示され、地域と学校の協働は今や喫緊の課題である。

本研究は、小学生を取り巻く地域コミュニティの現状を明らかにし、よりよい子ども環境の形成に資する資料を得ることを目的とする。前稿⁽¹⁾では、福岡市の都心部に位置するM小学校区を取り上げ、小学校、地域(自治協議会や公民館など)などへのヒヤリングと小学生の保護者へのアンケート調査をもとに、小学校での取り組み、地域の現状、保護者の意識等から、当該小学校区においても地域コミュニティへの帰属意識の低さや子ども会をも含めた地域活動の担い手不足、固定化による負担感の増、といった課題を見出した。これを踏まえて本稿では、同校区における小学校や子ども会、自治協議会の取り組みを、小学校が児童を対象に行った「地域とつながろう」アンケートや自治協議会が町内会長や子ども会に対して行ったアンケート、そして自治協議会の事業記録などをと、子どもと地域をつなぐ地域活動に焦点を当てて地域コミュニティの課題を探る。

2. 子どもと地域をつなぐ取り組みの現状

(1) 小学校の取り組み

福岡市の都心部に位置するM小学校およびその校区の現況については前稿に詳しく記載しているため本稿では割愛する。M小学校は平成25年度から福岡市「心輝くまちづくり事業」の「道徳教育

推進モデル校」の指定を受け、それと連動して「公民館こころ輝くまちふくおか推進事業(市民局)」の指定を受けた公民館とともに、地域と子どもを繋ぐ様々な取り組みが行われてきた。この事業は2ヵ年事業であったものの、平成27年度以降も校長、教頭をはじめ、この事業のために地域住民から選出された「地域コーディネーター」2名^{注2)}が継続した活動を積極的に展開している。

このモデル校指定が契機となって、小学校では「地域とつながろう」をテーマに「夏祭り」や「敬老会」の出し物への団体としての参加が平成25年度以降継続して行われるようになり、地域行事の盛り上げに一役買っている。記録に残っている平成20年度以降の地域行事の小学生の参加者数をまとめたものが表1である。平成24年度までの「夏祭り」への児童の参加は「子ども神輿」のみで、募集数の上限が60人であるにもかかわらず参加希望者は少なく、小学校を拠点に活動しているミニバスケットチームや少年野球チームに参加要請を行い、神輿の担ぎ手を確保していた^{注3)}。しかし平成25年度に小学校から児童への地域行事への参加の呼びかけが始まり、まずは「夏祭り」のプログラムに4年生の運動会的一种目であるダンス「ロックソーラン節」が加えられ、4年生有志を募ると、58名の参加希望者が集まり、そのダンスは夏祭りに活気を与え、好評を博した。その翌年は残念ながら台風により中止となったものの、平成27年度は「子ども神輿」の参加者は86人に大幅増加し、4年生によるダンス参加者も46人、平成28年度は「子ども神輿」に70人、ダンスに62人と、小学生有志による参加プログラムは「夏祭り」の定番となりつつある。さらに、小学校は平成27年度は「じゃんけんぽんでつながろう」のテントを出し、校長、教頭、地域コーディネーターや地域の大人たちが子どもたちとじゃんけんをし、勝ったら子どもたちがボランティア活動のひとつとして休み時間に作った「しおり」をプレゼントする、というイベントを行い、平成28年度は綿菓子テントを出店し、先生有志が綿菓子を作って販売するテントには子どもたちの長蛇の列が作られた。加えて、踊り手の高齢化で盆踊りの輪が年々小さくなってしまっていた盆踊りに子どもたちを参加させるべく、平成28年度は、まずは地域に「M音頭保存会」なる団体を立ち上げ、その保存会メンバーの踊りを録画した動画を小学校の休み時間に流したところ、この自主練習に参加する児童は少しずつ増え、当日の盆踊りは浴衣を着た子どもたちの踊りの輪が二重にもなり、近年まれにみる活況であった。

一方、「敬老会」においても、平成25年度までは小学生の参加は3人ないし5人の児童によるお手紙の朗読が披露されるのみで、プログラムは公民館を拠点に活動する大人のサークルによる演芸が中心であったものが、平成26年度には3年生の運動会ダンス種目である「花笠音頭」と同じく4年生の「ロックソーラン節」のプログラム参加が小学校教員から児童への呼び掛けで実現した。その有志による参加者数は3年生9人、4年生29人と各学年の1/4～1/5程度であったが、その一生懸命な披露は好評で、引き続き平成27年度には3年生ダンスが31人、4年生ダンスが34人と前年度に比べ大幅に増加した。さらに平成28年度には3年生のみに絞ったダンスが40人の参加者となり、各学年児童数の約半数を占めるほどである。

また、それに伴って我が子の晴れ姿を見学および写真に収める保護者の姿も増え、それぞれの行事の賑わいが増している。また、自治協議会からは小さな謝礼が出されるのであるが、「謝礼はいらないから出たい」という当日飛び入り参加の子どもたちが毎年複数人いるという状況である。

以上の行事への参加に加えて、「“地域とつながりたい！！”は、“つながり隊”の笑顔から」をキャッチフレーズに、平成26年度は以下の7つの「地域とつながろう」の取り組みが行われている。「敬老会」でのプレゼントカード作りや「夏祭り」のポスター作りやじゃんけんイベントの景品としての「しおり」作りなど、地域行事への直接参加だけでなく、作成したカードやポスターが地域で配布・掲示されることによって地域との繋がりを意識させる仕掛けづくりが地域行事に合わせて行われ、加えて、校区内の幹線道路花壇の花植えを4年生が地域で活動するN会とともに進めたり、といった地域の大人と直接触れ合う機会を特別な行事としてではなく、日常的な時間の中に取り入れるためのきっかけづくりを小学校は次々と展開している。

- ①校区の人と伝え合おう～小学校と公民館（地域の人）とで、それぞれが「つながろうの木」を作り、リングを模したカードに校区の人から言われて嬉しかった言葉などを書き、木に張り付けたものを交換して掲示。
- ②夏祭りをつなごう～前述の夏祭りでのダンスに加え、じゃんけんイベントの景品としてのしおりやポスター制作。
- ③お年寄りをつなごう～前述の「敬老会」でのダンス披露に加え、お年寄りに配るカードの「造形タイム」での製作。
- ④憩いの場でつなごう～学校ビオトープ周辺に設置するベンチを昼休みボランティアで地域のボランティアと一緒に製作。
- ⑤サークルをつなごう～3年生が公民館のサークル活動^(注4)に参加
- ⑥夢に向かってつなごう～6年生が様々な職業に携わる地域の大人をGTとして招き、小グループで話を聞く
- ⑦文化祭に参加してつなごう～公民館文化祭に「造形作品展」で展示した作品をいくつか展示する。

表1 自治協議会開催の主事業参加者数の推移

		H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28
夏祭り	子ども神輿	36	49	54	49	57	55	台風により中止	86	70
	4年生ダンス						58		46	62
	出店								じゃんけん	綿菓子
敬老会	お手紙	3	5	5	3	台風により中止	3	3	3	2
	3年生ダンス							9	31	40
	4年生ダンス							29	34	
デイキャンプ	小学生	記録なし	28	記録なし	記録なし	23	59	67	82	83
	保護者		14			6	27	42	45	42
	計		42			29	86	109	127	125
子ども餅つき大会	中学生				28	65	72	87	80	未実施
	小学生	119	11	22	60	72	101	129	124	

(各年自治協議会青少年育成部、文化部の事業報告書より筆者作成)

また、平成25年度に小学校が児童に対して行った「地域とつながろう」アンケートの児童の地域の行事への自由参加をまとめたものが表2、学校での呼びかけ参加あるいは学校内でのボランティアなどによる地域行事への間接参加の状況をまとめたものが表3である。1年生を除く全ての学年において「夏祭り」への参加が最も多く、ついで「校区運動会」となっている。残念ながら小学校

表2 地域の行事への参加

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	計
公民館のイベント	17 27.9%	21 33.9%	21 31.8%	26 26.3%	40 35.7%	12 12.0%	137 27.4%
校区運動会	3 4.9%	22 35.5%	23 34.8%	38 38.4%	57 50.9%	31 31.0%	174 34.8%
夏祭り	0 0.0%	28 45.2%	34 51.5%	43 43.4%	71 63.4%	61 61.0%	237 47.4%
デイキャンプ	9 14.8%	14 22.6%	8 12.1%	10 10.1%	20 17.9%	7 7.0%	68 13.6%
防火訓練	13 21.3%	22 35.5%	14 21.2%	12 12.1%	15 13.4%	10 10.0%	86 17.2%
餅つき大会	4 6.6%	23 37.1%	26 39.4%	28 28.3%	15 13.4%	20 20.0%	116 23.2%
どんど焼き	1 1.6%	8 12.9%	1 1.5%	8 8.1%	48 42.9%	8 8.0%	74 14.8%
ママとおやじの会のイベント	2 3.3%	19 30.6%	14 21.2%	11 11.1%	6 5.4%	23 23.0%	75 15.0%
T会、子ども会のイベント	2 3.3%	15 24.2%	12 18.2%	16 16.2%	24 21.4%	13 13.0%	82 16.4%
校区内施設、神社などのバザー	5 8.2%	16 25.8%	6 9.1%	8 8.1%	24 21.4%	10 10.0%	69 13.8%
その他	0 0.0%	1 1.6%	0 0.0%	6 6.1%	4 3.6%	0 0.0%	11 2.2%
	61	62	66	99	112	100	500

表3 学校での参加活動

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	計
N会との花うえ	0 0.0%	3 4.8%	0 0.0%	99 100.0%	6 5.4%	1 1.0%	109 21.8%
花のかんばん作り	3 4.9%	0 0.0%	0 0.0%	8 8.1%	13 11.6%	9 9.0%	33 6.6%
しおり作り（夏祭り）	61 100.0%	62 100.0%	66 100.0%	99 100.0%	112 100.0%	100 100.0%	500 100.0%
つながろうの木	4 6.6%	41 66.1%	13 19.7%	16 16.2%	30 26.8%	10 10.0%	114 22.8%
カード作り（敬老会）	61 100.0%	62 100.0%	66 100.0%	99 100.0%	112 100.0%	100 100.0%	500 100.0%
敬老会に参加（おどり、手紙読み）	4 6.6%	6 9.7%	11 16.7%	21 21.2%	4 3.6%	5 5.0%	51 10.2%
全児童数	61	62	66	99	112	100	500

が地域とつながるための積極的な働きかけを始めた平成25年度単年度の調査であるため、その経年変化を見ることはできないが、自由記述には子どもたちの楽しかった多くの感想が書かれ、今後してみたい地域活動にはマラソンやサッカーや野球などスポーツのイベントや料理や作品などの製作、昔遊びやフリーマーケットなど多彩な活動が子どもたちの自由な発想で書かれており、学校行事では経験できない活動に対する地域への期待が窺える。また、「夏祭り」で配布するしおり作りや「敬老会」で配るカード作りはこの年は全ての学年において100%の参加率であり、ボランティア活動という位置づけながら、クラス単位での積極的な取り組みがわかるとともに、子どもたちが、それらの活動に対して喜びと達成感を自由記述に書いており、当該小学校が目指した「地域の人の気持ちの良い交流^{注5)}」を見ることができる。

(2) 地域の取り組み

さて、前述のように小学校では「心輝くまちづくり事業」の「道徳教育推進モデル校」の指定を契機に児童と地域を繋ぐためのいろいろな試みがなされているが、地域の取り組み状況はどうだろうか。

表1に示すように、小学校からの児童への呼び掛けの効果は絶大で、平成25年度以降、「デイキャンプ」「子ども餅つき大会」等子ども関連の地域行事への参加者数は大幅に増加している。しかしながら、当該校区は平成22年度に「子供育成連絡会（以下、「育成会」と略称）」を脱退しており、自治協議会における青少年育成部の活動を支える保護者組織がなくなっている。この増え続ける参加者を抱えての行事運営にあたっては、自治協議会役員に加えて、小学校「おやじとママの会」やPTA組織「地域委員」、民生委員、主任児童委員等の助けを借りている。

そこで、子どもと地域をつなぐものとしての「子ども会」の現状を見てみよう。当該校区の単会子ども会は平成21年度に1つの子ども会を除く12の子ども会が、平成22年度にはすべての単会子ども会が「育成会」を脱退している。自治協議会に現存する平成20年度以降の事業報告書においても子ども会の資料はないため、平成22年度の「校区子ども会意見交換会」（以下、「意見交換会」と略称）の議事録と青少年育成部長が交替した平成25年度に37の町内会長に対して行われた子ども会の組織調査、平成26年度に筆者が行った調査、平成28年度の体育部が「体育祭」について行ったアンケート調査の子ども会組織に関する内容をもとに子ども会の推移を取りまとめたものが表4である。平成22年度には13の子ども会があったのが平成25年度には10団体に、平成26年度には8団体に減じ、子ども会の存続は風前の灯である。また、原則町内の子どもが全員加入する1団体を除いて、子ども会への加入は任意となっており、子ども会加入児童数は10人以下が2団体、10人台が4団体、20人台が5団体である。M小学校の児童数は平成17年765人であったものが、平成22年には679人に大きく減少し、平成27年には657人、平成28年には663人と微増減で推移しており^{注6)}、少子化が子ども会衰退の背景にあることは間違いないが、そのことは子ども会役員の負担増に繋がり、「意見交換会」資料によると、育成会に加盟することでさらに育成会役員の選出と全体行事の運営手伝いの負担が増していることが育成会脱退理由として挙げられている。また、「意見交換会」の数年前から「育成会」からの脱退が相次ぐ中で、校区自治協議会の事業である子ども向けの行事への参加を

巡っては、子ども会への加入を条件とすることなどが子ども会と育成会との軋轢となっている。加えて個人情報の壁が立ちはだかつて単会の子ども会への加入勧誘も難しい現状が平成22年の「意見交換会」で既に語られている。

その単会子ども会は各町内会費からの補助金で運営されているが、町内会は多くの場合その運営実態を把握しておらず、良い意味でも悪い意味でも「お金は出すけど口は出さない」といった状況である。ましてや町内会挙げてのバックアップ体制を得ている子ども会は⑦の1団体だけである。そこには、また個人情報の問題があり、町内会長でさえ手に入る資料には町内の構成員の情報として年齢構成別の人数しか記載されておらず、町内の子どもの人数は把握できても個別の情報を持ち得ないのである。子どもの生活が塾やおけいこ事、スポーツクラブサークルなどで大きく占められ、子ども会や地域の行事に参加する時間の少なさと地域行事よりも家庭の行事が子どもたちの生活の主役の座を占めるようになった豊かさを背景として、子ども会活動の魅力が薄れてしまっている状況の中、子ども会への勧誘の方法も困難を極め、平成26年の子ども会へのアンケート調査によれば、「口コミで情報を仕入れ、声掛けする」や「道に立ってチラシ配り」、「新年度の集団下校時にチラシを配布」、「現会員から勧誘」など涙ぐましい努力がなされているにも関わらず、加入者数は減少の一途を辿っている。

しかし、そのような状況の中、町内会と子ども会が力を合わせて継続した活動を行っている町内・子ども会が前述の⑦である。平成28年度現在子ども会加入児童数は12人と決して多くはないものの、町内会と町内にある神社の氏子で構成する会が子ども神輿など神社の祭りを取り仕切るなど、子ども会と密に連絡を取りながら協働して子どもの活動を支えている。子ども会のソフトボール大会がなくなって久しいが、この町内・子ども会は自治協議会の行事である「壮年ソフトボール大会」もまた衰退し2チームの参加のみであることを逆手に取り、余る時間を利用して、子どもと女性のチームを作ってこの大会のおまけの試合を計画したり、校区の体育祭では参加団体のほとんどが仕出しのお弁当をとるところを、子ども会が町内会費からの補助金を使ってカレーライスの炊き出しをテントで行ったり、と近年地域コミュニティの希薄化が指摘される中で、老若男女一体となった体育祭の参加スタイルを継続している。

そこで、自治協議会の3大事業（夏祭り、敬老会、体育祭）の一つである体育祭の参加状況を子ども会の状況と合わせて整理したものが表4である。子ども会の衰退が校区体育祭に大きく影響していることが明らかである。校区体育祭の競技種目にチームとして参加するには幅広い年齢層の男女が構成メンバーとして必要である。その競技に適したメンバー集めは希薄化したコミュニティにおいては難関作業である。また、自治協議会の体育部が主催する協議説明会や抽選会などへの参加はもちろん、前日のテントの準備から当日のお弁当や飲み物、おやつの手配に至るまで、さまざまな準備活動を必要とする。そのほとんどを子ども会に依頼し、「お金は出すけど口は出さない」という姿勢を貫いてきた町内では子ども会の消滅が校区体育祭への不参加になっていることは、町内会長へのアンケート調査からも明らかである（表6）。しかし一方で、「子ども会」が消滅した後、町内会の体育委員を中心に「体育祭」参加を安定して続けている団体が⑯⑰⑱の町内合同の団体である。町内会の回覧板やメール、口コミ等で参加者を募り、参加競技の割り振りやテント運営、お

表4 子ども会 表5 体育祭 の変遷

	世帯数 (H28)	子ども会				体育祭								
		H22	H25	H26	H28	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28
①	284	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	合同
②	290	×	×	×	×	×	×	×	×	×	45	38	35	予定
③	221	13	6	×	×	48	45	37	49	38	17	×	×	×
④	408	21	×	×	×	45	54	57	×	×	×	×	×	×
⑤	265	18	35	32	○	85	89	105	104	117	99	104	87	予定
⑥	113	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
⑦	450	22	15	○	12	59	72	73	78	76	74	74	84	予定
⑧	200	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
⑨	150	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
⑩	84	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
⑪	132	23	20	○	○	47	38	25	35	23	36	31	24	予定
⑫	300													
⑬	337	51	52	○	25	47	49	65	55	55	59	70	43	予定
⑭	298	4	×	×	×	22	46	32	42	×	×	×	×	×
⑮	358	11	6	×	×	29	23	11	×	×	×	×	×	×
⑯	70	×	×	×	×	53	50	62	78	47	79	59	65	予定
⑰	245	×	×	×	×	×								
⑱	200	×	×	×	×	×								
⑲	193	×	×	×	×	×	×	36	41	46	66	46	×	×
⑳	230	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
㉑	38	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
㉒	130	9	9	×	×	34	44	35	30	35	36	×	×	×
㉓	102	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
㉔	350	26	36	42	41	55	61	58	59	68	80	91	97	予定
㉕	314													
㉖	148	20	14	14	○	70	48	27	30	51	50	41	52	予定
㉗	223													
㉘	220													
㉙	58	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
㉚	144	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
㉛	213	×	×	×	×	×	×	×	×	13	1	×	×	×
㉜	194	10	×	○	14	29	59	51	52	65	30	24	×	×
㉝	136	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
㉞	369	11	14	18	15	×	59	46	55	56	64	56	45	予定
㉟	210													
㊱	195													
㊲	70	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
T会												63	80	予定
人数	7942	239	207	106	107	623	737	720	708	690	736	697	612	予定
団体数		13	10	8	8	13	14	15	13	13	15	12	10	予定

(※ ○印は構成人員数が不明の団体)

(「校区子ども会意見交換会」H22、「子ども会組織調査」H25
「体育祭アンケート調査」H28などを基に筆者作成)

表6 体育祭不参加の理由（原文まま）

①	子ども会を今年立ち上げたばかり（11名）
②	
③	3年前までは子供会を中心に参加していたが、小学生の減少により子ども会は解散しました。それに伴い大人も参加しなくなり、人数が集まらないため
④	子ども会中心にやっていたので、子どもの会の解散により参加人員の把握が困難になっている
⑤	
⑥	
⑦	
⑧	子ども会なし。老人化して参加できない
⑨	無回答
⑩	
⑪	
⑫	
⑬	
⑭	無回答
⑮	子どもの数が少ない（6人）。転勤族の方は地元の行事に無関心。高齢者が圧倒的に多い。学校が遠い
⑯	
⑰	
⑱	事前準備（プログラム作成等）の大変さ、経費が掛かり過ぎ、チーム作り（集め）が大変、競技種目が旧態依然、体育祭の目的が不明確、競う種目ばかり（本当？）
⑲	
⑳	
㉑	町内で人数が集まらない
㉒	
㉓	
㉔	
㉕	
㉖	
㉗	
㉘	
㉙	仕事上の都合
㉚	戸建て住宅、集合住宅共子育て終了世帯が多数を占めているため、残念です
㉛	子ども会がなく、毎年参加できていないから
㉜	
㉝	
㉞	
㉟	
㊱	
㊲	
㊳	

弁当や飲み物の手配、「体育祭」の本部運営までを合同チームの町内会長とともに行っている。また、同様に②の町内でも「子ども会」が消滅した後、町内会長以下町内会役員が孫の友人関係、顔見知りの小学生の保護者、町内のマンションへのチラシ配布等、さまざまな手を使って「体育祭」への参加者を集めている。しかしながら、お弁当やお菓子里に飛びついて喜ぶようなことの少なくなっ

た豊かさを背景に参加者の募集は簡単ではないという。

さて、平成25年から「地域とつながろう」を具現化する試みを続けてきた小学校は当然校区体育祭への参加を児童に呼びかけた。しかしながら、体育祭参加団体のほとんどが子ども会によって運営されている現状では、チーム参加ではない競技種目はいくつかあるものの、子ども会に加入していない子どもたちの居場所となるテントもなければ、お弁当やおやつもなく、そんな子どもたちには体育祭に参加した、という実感はおろか、自分たちの住む地域とのつながりを強く意識できる経験にはならなかったと思われる。そこで自治協議会はその反省を踏まえて、平成26年度体育祭においてフリーのテントを設置し、子ども会に加入していない子どもの居場所とする提案がなされた。そのテント運営に平成25年度より福岡市の助成金を得て当該校区の主任児童委員を中心に地域の家庭教育推進のための活動を行っていたT会に白羽の矢が立てられたのである。しかし、T会はそのフリーテント案を却下し、子ども会のない町内の子どもと親、すなわち子ども会に加入したくても出来ない子どもたち家族を集めてチームを作り、体育祭にチームとして参加する、という逆提案を行った。T会は子どもや親向けのイベントの案内・申し込みのチラシは小学校を経由しての全数配布をしており、平成25年度に行った「親のための学び舎講座」や「絵本の読み聞かせ講座」「体力アップ（ドッジボール）」や「今より速く走ろう」などの活動はおおむね好評で、特に運動系のイベントへの人気が高かったことを念頭に置いてのことであった。しかしながら、寄せ集めのチーム編成と体育祭参加の経験のないメンバーでのこの試みは相当な見切り発車であり、多くの地域ボランティアと特別に募集した大学生のボランティアの力に支えられての運営となった。他のチームのような町内会からの補助金を持たないため、お弁当代として実費を参加者から集めたものの、参加者希望者は多く集まり、寄せ集めのチームにもかかわらず、親も子もチーム一体感を得ての応援が繰り広げられた。この活動はその後も継続し、平成27年度はテントを2張りに増やし、平成28年度は100名を超えそうな勢いであるため、締切日を過ぎてからの申し込みを断った例も少なくない。この参加者のすべてとは言わないまでも、多くの保護者はT会からの事前準備の協力要請に対して、快くしかも積極的に活動し、地域と繋がり、子どもを通じての保護者の繋がりに主体的に関わろうとする姿勢が見うけられる。

その他特筆すべきこととして、⑤の団体は子ども会の消滅を憂えた町内会が子どもの勧誘から活動の支援まで全面的にバックアップ体制を持つI会と命名した「町内子どもの会」をつくり、定期的な廃品回収や体育祭参加、ボーリング大会などを町内会主導で続けている。町内会会員の小学生がいる家庭はすべてI会会員として対応し、行事等への案内はするが参加は自由という子育て家庭への暖かい眼差しにあふれた地道な活動の10年以上に渡る積み重ねは、子ども会に替わる組織運営の成功事例と考えられる。しかしながら、定期的に発行されていた「I会通信」と呼ばれる町内新聞は発行が途絶え、町内会による全面的バックアップ体制の維持が厳しくなっている状況も見受けられる。長期にわたる活動における世代交代、人材養成、人材発掘の難しさが垣間見える事例である。

しかし、その活動に倣って同様の「町内子どもの会」を立ち上げようと試みる団体が①である。残念ながら平成28年度の体育祭への単独チーム参加は参加メンバーが集まらず断念し、先に述べた

T会への間借り参加、という形態をとることとなった。子ども会が消滅してしまったところからいきなりの合同子ども会の復活は厳しいものがあると思われ、合同子ども会に対する町内会長の否定的意見も耳にするが、町内会をまたいで合同子ども会が4団体あることを考えると、その運営に大きなハードルがあるとは思われない。体育祭を契機としてT会への間借り参加を続ける中で、隣接する町内会の保護者の顔見知り度、新密度が増していくならば、それが合同子ども会立ち上げの契機になるやもしれない。T会はその希望に向けて参加募集のチラシに「町内会との連携を深める目的」を書き込み、居住町内を申し込み時に記入してもらったこととした。このことによって参加者の居住町内会を把握することが可能となり、平成28年度のテント内運営でのいくつかの仕掛けづくりを行う予定である。

一方、自治協議会は平成22年の「意見交換会」以降、「子ども会」への働きかけが出来ないままに、それまで子ども会に要請していた行事の案内・募集は小学校を通じて要請文を児童に配布し、行事によっては自治協議会の全面協力のもとに行ってきた。前述したように青少年育成部の事業である「デイキャンプ」や「子ども餅つき大会」の参加者数は年々増加しているものの、「デイキャンプ」は子どものいる家庭が家庭行事として参加する一般のイベント化していると思われる面も垣間見え、参加した保護者の積極的な協力も期待できない現状の打開に向けて、申し込み時に保護者のお手伝いが可能か否かの記入欄を設け、主体的なそして積極的な関与を促す仕組み作りを模索中である。「子ども餅つき大会」はまさに子どもが主体となる活動を上手く展開しており、多くの小学生をいくつかのグループに分け、同様のグループに分けた中学生と組み合わせたグループ毎に、餅をつく、丸める、食べる、というローテーションで回すのである。餅つきに関わらない時間は餅つき大会が行われている小学校のグラウンドで小学生と中学生が入り混じって遊ぶ姿が見られる。更には、中学生にはテント設営やもち米を蒸すための火熾しと火の管理、マキ割り、家庭科室内での豚汁調理、最後には杵や臼、テントなどの後片付けなど、数々の役割が与えられ、地域の大人との共同作業、あるいは地域の大人に教わりながらの作業である。この役割は中学校の部活動単位での参加要請がなされ、毎年野球部、サッカー部、剣道部、ハンドボール部など体育会系の部活が多く参加する。中学校の多くの体育会系部活動では平日遅くまでの練習に加え、土日祝日の練習も多く、地域との乖離を憂う声が毎年のように各小学校区単位で行われる中学校の「地域懇談会」の席上で地域の側から出されるのであるが、その乖離を埋める試みとも言えるであろう。

4. 結

福岡市「心輝くまちづくり事業」の「道徳教育推進モデル校」の指定を受けたM小学校の地域連携への積極的な働きかけは、その2ヵ年の事業期間を終えた後も着実に歩みを進めている。同様に、自治協議会がルーチンワークとして毎年続けてきた地域事業を少しでも改善するために、自治協議会においてもアンケート調査を行うなど、少しずつではあるが変化の兆しが見える。しかしながら、その小学校の数多くの取り組み内容と児童に対するアンケートの結果は地域と共有されることはなく、同様に自治協議会の各部の事業報告も全体としての情報共有は自治協議会内でも行われておら

ず、子どもを支える最も身近な地域の組織である「子ども会」の衰退にも何ら対策は講じられていない。小学校と地域が力を合わせて取り組む、という形が出来つつある中で、本稿ではその双方の取り組み内容を記録に残し、この歩みを止めないための過去の記録の整理を行った。既に自治協議会においては過去の「子ども会」に関する資料は散逸し、団体数、構成人員数の把握も難しく、書類保管期間5年間を過ぎて各事業の参加者数のわからないものも少なくない。しかし、地域事業の参加者数の変遷と小学校と自治協議会との働き掛けとの関連性は明らかである。まずは小学校と地域双方で情報の共有化を図り、課題の解決に向けて地域事業の見直し、補強等が必要であろう。

謝辞

M小学校が行ったアンケート調査をはじめ、自治協議会、各町内会や子ども会の運営についての資料収集に際して小学校をはじめ自治協議会各部、町内会などにご協力を頂きました。特にM小学校校長からは多大な協力を得ました。ここに記して感謝いたします。

〔脚注〕

^{注1)}参考文献1)

^{注2)}事業が行われていた2年間は3名の「地域コーディネーター」が配置されていたが、その後は2名によって継続した活動が行われている。

^{注3)}自治協議会青少年育成部資料にもとづく。

^{注4)}公民館での「俳句」や「生け花」などのサークル活動への児童の参加は児童にもサークルの主な構成メンバーである高齢者にもとても好評だったことを校長は報告している。

^{注5)}当該小学校は「地域につなぐ、地域とつながる学校」として地域に開かれた学校づくりを進めていくために、「学校と地域がそれぞれの思いや願いを共に話し合い、子どもたちの課題を解決するために力を合わせて取り組むことを大切にしている」ことを校長は様々な場面で言葉にしている。また、そのことによって子どもたちは社会性やコミュニケーション能力が育ち、学校は地域の支援を受けて豊かな教育活動が可能となり、地域の人たちは生きがい・やりがいを感じることができるとともに、地域の活性化にも寄与し得る、ということを通じた活動報告等で述べている。

^{注6)}教育統計年報（福岡市 各年5月1日）より

〔参考文献〕

- 1) 安恒万記：「小学生を取り巻く地域コミュニティの現状と課題－M小学校区を事例として－」、『筑紫女学園大学・短期大学部紀要 第10号』2015
- 2) 特定非営利活動法人 子どもNPOセンター福岡 『ふくおか子ども白書 2014』2014
- 3) M小学校 『平成27・28年度 福岡市教育委員会全校内研究推進事業 研究のまとめ』

(やすつね まき：現代社会学科 准教授)